淑徳大学

# アーカイブズ・ニュース

NEWSLETTER of SHUKUTOKU UNIVERSITY ARCHIVES

第 7 号　平成 25 年（2013）7 月 31 日発行

## ― 句集『春草』（マハヤナ中央病院俳句会）―

平成 25 年 6 月、東京都板橋区の前澤明氏より句集『春草』が寄贈された。『春草』はマハヤナ中央病院の医師と患者が中心となって結成された俳句会の機関誌で、昭和 32 年（1957）1 月に創刊された。マハヤナ中央病院は昭和 28 年（1853）10 月に「マハヤナ学園中央病院」として開業し、俳句会も翌年には結成、年 2 回句集を発行していたが、昭和 32 年 1 月念願かなって月刊の機関誌を発行することとなった。

# 授業科目「長谷川良信の思想と生涯」の担当教員として思うこと（二）

淑徳大学名誉教授　金 子　 保

例年、第4回目の授業では、淑徳大学の宗教行事をテーマにして、降誕会・盂蘭盆会・成道会・日常勤行について解説し、釈尊・法然・輪島聞声尼と学祖・長谷川良信との深いかかわりを理解し、「淑徳」の由来に触れていたが、その締めくくりとして、担当教員は謡曲の一節を教壇から披露し、多くは5号館や7号館の大教室であったが、学生諸君の拍手を頂戴したことがある。

淑徳大学の開学者で、初代学長・長谷川良信が創立した淑徳女子商業高校（巣鴨高等学校の前身）では、長らく謡曲仕舞が正課（＝必修科目）だったと聞いている。このことは、東京杉並の堀の内の能舞台（文学担当の杉山教授の自邸内）での稽古の合間のことであったが、当時の卒業生の話として拝聴した記憶がある。その婦人は淑徳女子商業を卒業後も、堀の内通いを続けたが、そのお陰で、職業生活に自信を持って取り組むことができたといった所感に出会ったわけである。そこにこそ教育家としての長谷川良信のねらいがあったかと思われたのである。指導は金春流の能楽師で人間国宝として知られていた杉山和世教授の御尊父であって、わが国唯一の「正課としての謡曲仕舞」は、長谷川良信との交友の中から生まれたものと推測される。

長谷川良信は「巣鴨に想う」と題する随想の締めくくりの部分で、「本校創立以来、日本のみならず世界の最高芸術であり、尚その根底について仏教的人生観、世界観に立つ所の『謡曲仕舞』を以て情操教育のたて糸とし、これに配するに社会福祉施設への協力奉仕、募金、慰問、供養等を横糸として実動奉行する事」(『長谷川良信遺滴』174頁）とあるように、「謡曲仕舞」と「社会奉仕的行動主義」を「本校」すなわち淑徳女子商業高校の情操教育の二本柱と位置づけている。

さて、1980 年の新学期に入って間もない頃のことであった。杉山和世教授とは、懇親会の席であったが、ドーナツ盤のレコードで覚えた「高砂」を披露した際の「観世ですね」との指摘に、まさか能楽師とは知るはずもなかった私は、本当に仰天させられたことであった。それは学生時代から親しんできた児童養護施設の卒園生の結婚披露宴で、約束を果たすためにひそかに練習した成果ではあったが、これが機縁となって、ゼミ学生と堀の内の能舞台に出かけたわけである。杉山教授は新入学生の入会減少を嘆いておいでのようすであったが、その結果は、新入学生の入会はなかったものの、教員の私が以後、稽古に通うことになった。大学では教室や記念館、大巌寺の書院などを舞台に見立てての稽古が続けられていて、淑徳大学と國學院大學の合同夏季合宿にも学生や卒業生とともに参加したこともある。

その後、一時期のことだが、私は堀の内にもかなり熱心に通ったとはいえ、謡曲の稽古は中途半端に終わってしまったように思う。しかし、70歳を過ぎてからのことであるが、書斎でひとり密かに習い覚えた小謡の一節など唸っていて、何か新発見をしたような気分に浸ったことがある。

半世紀前の昔のことであるが、学生時代にマックス・ウェーバーの訳書の輪読会があって、このときエトス（ethos）の概念に心が強く惹かれた。ウェーバーの「エトス」については、「時代思潮」などと解釈して済ませてきたが、それから何と50年近く過ぎて、定年退職の年の釈尊降誕会記念講演「善財童子の如くありたいものである」の準備をしている際に、学祖最晩年の録音記録を聞いていて気づかされたのである。学祖

は、善財童子の修行の階梯について、「単細胞の生物から、やがて高等動物、やがて人間、それから天人、それからやがて、声聞、縁覚、菩薩、仏（ブツ）と、こうゆうふうに進んでいけば・・・」と、いわば30億年以上の昔の、原始地球の海中に誕生した単細胞の生命体に、その起源を求めているようで、ちょっと不思議な気分となったときのことである。おそらく、心のゼロポイントもそこにあるはずで、これが進化発展して、やがて二大生物として知られる植物と動物に分化したわけであり、解剖学の植物器官と動物器官は、その名残であると考えられる。その始まりは、おそらくギリシャの哲学者アリストテレスの植物精神と動物精神にある。そして実は、エトスとは、植物精神のことではなかったのか。このことにハッとして、何か新発見したような心楽しい時間を過ごしたわけである。そういえば、フランス革命の時代の『百科全書』（岩波文庫）で「植物心理学」を発見して、奇異に思った古い記憶も蘇えってきて、しかも謡曲「高砂」に登場するシテは「松の精霊」で、植物だったわけである。食物は咀嚼嚥下され、電解質と化し、水に溶けた状態で体内に吸収されるが、実に内臓機能の原型は植物なのだ。植物も我々と同じく、いのちあるものであって、代謝機能を営む器官が備わっていることを不思議に思わずにはいられない。あらためて調べてみると、ギリシャ哲学では、人間に特有の理性的能力（認識、思考、判断の機能）のほかに、動物的精神（感覚、知覚、そして運動の機能）と、そして植物的精神（栄養と繁殖の機能）も考えられていて、それぞれ、ロゴス logos、パトス pathos、エトス ethos と呼ばれていたわけである。

1991年度卒業アルバムより

そこで、謡曲「高砂」であるが、舞台前半で普通の人間として登場した「尉」と「姥」が、後半に入ると高砂住吉の神としての正体が明かされて姿を消し、本来の姿に変わって舞い納めて終わる。「正体を知る」とは、ユング心理学の自己実現（self-realization）の意味に重なるように思う。“realization”には理解の意味があるから、クライアントは、「実は、私は〇〇だったのだ」と気づく自己覚知の過程、これが自己実現（ユングはこれを個性化 individuation としている）と解釈できるからである（拙著2011『自己実現の心理学』クオリティケア）。また、謡曲「高砂」では、草木には神が宿り、草木は神のヨリシロとして扱われている。そこには、植物にも神（＝心）があるとするアニミズム信仰を伺うことができる。次に一例を示す。「それ草木心なしとは申せども、花実の時を違へず、陽春の徳を具へて南枝花始めて開く。然れども、この松はその気色とこしなへにして花葉時を分かず。」（網本尚子（編）2010『謡曲・狂言』角川ソフィア文庫）。文中の「とこしなへ」とは、永遠不変という意味であるから、松という植物の姿はいつも変わらず、花や葉に時節による変化がみられない。その不変の姿は植物的精神の象徴「草木心」として考えられる。

他方、エトス（Ethos）という語についてマックス・ウェーバーは、「心的態度」（Gesinnung 英訳 attitude）、「倫理的態度」（ethische Verhalten）、「生活の仕方」（Art der Lebensfulung）、「人間」（Menschentum）などと言い換えている（マックス・ウェーバー／梶山力・大塚久雄訳 1962「解説」『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 上巻』岩波文庫148頁）。翻訳者の「解説」によれば、エトスをウェーバーは「人々

を内側から押し動かすところの起動力」として捉え、「自分の血となり肉となっている《倫理》の特質にしたがって特定の反応或いは作用の仕方を示すことになる」としているから、それはまさしく心的態度であり、生活の仕方であり、人間の生き方そのものである。キリスト教の新教徒は日々内省を繰り返し、ひたすら神の声に傾聴する。神の声が、血肉となって作用して、これがプロテスタンティズムの倫理的態度となる。資本蓄積は神の声にしたがった結果に過ぎない。「神の声」ではなく、精霊（デーモン）の声に耳を澄ませたのは古代ギリシャの哲人ソクラテスであった。ウェーバーも、「人生をあやつっているデーモン（守護霊）」（ウェーバー『学問としての職業』岩波文庫）を見いだして、これに従うことを勧めている。謡曲「高砂」では、高砂の松と一体化した老人を理想とする。松の精霊の声にしたがった生活、それは植物的精神による生活である。人々の心の、最も奥深い地点の「物語」として記録される。

次に、謡曲「隅田川」は、わが子を人買いにさらわれ、これを取り戻そうと、東国へ旅立った母の子を思う一念の物凄さに心打たれる。それを、「狂」で表示している。たとえば、「都より女物狂の下り候が、是非もなく面白う狂ひ候を見候よ」とある。一節は、隅田川の渡し守が客を待っていると、にぎやかな声がして、都から来た女物狂に皆が心動かされて見物しているので、船客とともにその女を待っている場面である（網本尚子（編）上掲書）。母は「女物狂」として登場するが、けっして感覚・知覚まで狂わせてはいないかに見受けられる。『岩波国語辞典』でも「狂」は、「①常軌を逸する。②一事に熱中して生活の均衡を失う。③こっけい、おどけ。④異常に激しい、騒がしい、荒々しい。」とある。ところが、白川静の『常用字解』によれば、「音符は王。王は王位の象徴である鉞（まさかり）の形」で、古来、王の命令で遠く旅立つ使者は神聖な鉞に足を乗せて霊力を授かって出発した。そのように、霊力によって異常な力を得て「くるう」ことを「狂」という。『論語』には「狂狷（きょうけん）」とある。この意味は、志が高く、心が狭いこととされる。孔子は、中庸の人（正しくて、行き過ぎや不足のない人）を第一としたが、これが見つけられないときは、狂狷の人がよいという。その理由は、「狂者は進みて取り、狷者は為さざる所有り」という点にある。すなわち、狂者は理想が高く意欲的であるが、狷者は節操がかたく悪いことはしないという点にある。

ここで注目すべきは、「狂狷」の狂も狷も、ケモノ偏「犭」がついている点にある。アリストテレスの「動物的精神」と重なるように思うからである。隅田川の母は、一見、常軌を逸しているかに見えて、実は狂狷の人であって、謡曲『隅田川』の結末ではわが子の死を分別・受容して、「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏・・・」と念仏を称え、わが子の菩提を弔っている。

謡曲「隅田川」の物狂いの母の心は、植物的精神を基盤に、人買いにさらわれて姿を消したわが子を捜し求める。捜し求める心は、鬼子母神も、十牛図の童子も、そして善財童子も変わらない。その激しさは、「狂狷」の心、動物的精神に対応するように思う。

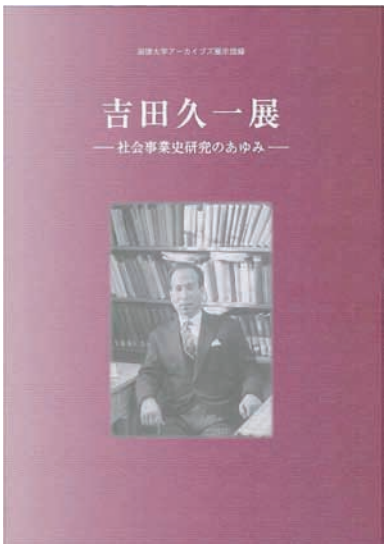
**課外講座「能楽」の発表会**

**看板の左が杉山和世教授（1992 年度卒業アルバムより）**

本稿の結びとして、長谷川良信の教育思想を引き継ぎ、昭和44 年（1969）から淑徳大学協賛会事業の一環として課外講座が

開設されたが、そこには詩舞、茶道、華道、コーラスとともに、能楽があって、担当の講師は「野村和世」とある。それは私が知る杉山和世教授であったことを付記しておきたい。（合掌）

## 「吉田久一展―社会事業史研究のあゆみ―」開催




吉田久一展図録

淑徳大学アーカイブズでは、平成 23 年 10 月 8 日～平成 24 年 3 月 30 日の会期で「吉田久一展―吉田久一の戦中・戦後史―」を開催しましたが、このたび平成 25 年 5 月 11 日・12 日の両日淑徳大学千葉キャンパスで開催された社会事業史学会第 41 回大会にあわせ、先の展示内容をさらに充実させ、「吉田久一展―社会事業史研究のあゆみ―」を淑水記念館 3 階のアーカイブズ展示室 2 において開催いたしました。

吉田久一氏は、昭和 10 年（1935）に旧制大正大学に入学し、学生時代にセツルメント活動や社会事業調査に精力的に取り組み、戦後は淑徳女子農芸専門学校（後に淑徳短期大学）や大正大学・日本社会事業大学・日本女子大学・東洋大学等を拠点として、「社会福祉」と「近代仏教」の二つの学問領域を歴史研究の立場から追い続けるとともに、社会事業史学会の設立とその運営に大きな役割を果たしました。

本展示の内容は、まず「1　故郷での生活」で、大正 4 年（1915）に新潟県中頸城郡板倉村（現上越市）に生まれ、新潟県立高田中学校に入学するまでの吉田氏の青春時代を取り上げています。「2　社会事業との出会い」では、旧制大正大学における学生時代を扱っています。この時期に吉田氏は社会事業研究に深くかかわっていくのです。「3　戦争の時代に生きて」では、徴兵検査で丙種合格となった吉田氏が昭和 18 年（1943）9 月に通信兵として出征し、満州間島省延吉および八重山群島石垣島を転戦、昭和 21 年（1946）1 月に無事鹿児島港に復員するまでの時代を取り上げています。八重山群島では、軍務の合い間を縫って年中行事調査を行い、戦後その成果を「八重山群島年中行事調査報告書」としてまとめるとともに、この時期の体験をもとに『八重山戦日記』（昭和 27 年自費出版）を著しました。「4　長谷川良信と吉田久一」では、仏教者・教育者であり社会事業家であった大学時代の恩師長谷川良信とのつな

がりを取り上げています。吉田氏は良信が設立したマハヤナ学園に奉職し、彼に大きな影響を受けました。「５　社会事業史と近代仏教史の研究に邁進」では、戦後研究に専念する道を選んだ吉田氏の姿について、大学での教育活動とともに扱っています。吉田氏は昭和 23 年（1948）に第 1 回社会事業文献賞を受賞しますが、その後多くの歴史学者と親交を結びながら学問に打ち込む日々を過ごしました。その活動は歴史学を背景として、社会事業史研究や日本近代仏教史へと広がっていきました。「６　社会事業史学会への道」では、昭和 32 年（1957）に吉田氏らによって立ち上げられた近代社会事業研究会（近代社研）から、社会福祉研究の水準を向上させることを目的とした社会事業史研究会結成（昭和 48 年（1973））へと続く流れを扱っています。社会事業史研究会は平成 11 年（1999）に社会事業史学会と改称し、さらなる飛躍を遂げて現在にいたっています。

本展示は、常設展示に準ずる形で常時展示を行っておりますので、ぜひ御来館いただき吉田久一氏の生涯と業績に触れていただければと存じます。お問い合わせ等がありましたら、淑徳大学アーカイブズまでご連絡下さい。

## 「社会事業史学会 40 年のあゆみ」展開催

社会事業史学会は昭和 48 年（1973）の結成から 40 年が経ちましたが、平成 25 年 5 月 11 日・12 日の両日淑徳大学千葉キャンパスで開催された社会事業史学会第 41 回大会において、そのあゆみを振り返る「社会事業史学会 40 年のあゆみ」展が、「吉田久一展―社会事業史研究のあゆみ―」と同じアーカイブズ展示室 2 において開催されました。

展示では会員数の動向をはじめ、大会・機関誌のテーマ一覧や大会プログラム、出版物など、40 年間の会のあゆみが資料とともに年表風に紹介されました。また、これまでの「社会事業史文献賞」受賞作品も展示され、学会に参加された会員の方々は、懐かしそうに展示に見入っていました。

## 『高瀬真卿日記』二（淑徳大学アーカイブズ叢書 2）の刊行

『高瀬真卿日記』二が 2013 年 3 月 20 日付で刊行されました。本巻には高瀬真卿が書き記した日記のうち、明治 25 年（1892）11 月から同 31 年（1898）8 月までの「萩村日記」第四～第八 5 冊が収録されています。

この時期、東京感化院は明治 26 年 3 月に駒込曙町から南豊島御料地（現渋谷区広尾）に移転し、29 年には京都にも感化院の設立を計画するなど、高瀬は活発な院経営を展開しました。このこともあってか、明治 30 年暮れには在院生の人数も 100 名を超え最大数を記録、院の運営も軌道に乗っていました。

本書の刊行によって、高瀬真卿の活動及び東京感化院の経営がさらに明らかにされることを期待します。

発行日　2013 年 3 月 20 日発行
価　格　本体 3,000 円＋消費税
取　扱　株式会社ディーエスサービス
東京都板橋区前野町 5-5-2
大乗淑徳学園法人本部ビル内
TEL　03-5392-0081

---

## 「淑徳大学アーカイブズ史料講読会」のご案内
### ── 参加者を募集しています ──

淑徳大学アーカイブズでは、地域との連携を図り、地元の方々との交流を深めるため、「史料講読会」を開催しています。現在は当アーカイブズが所蔵している明治から大正期にかけての高瀬真卿の日記を読み進めていますが、今後は当アーカイブズが所蔵する史料はもとより、江戸時代から明治・大正・昭和にいたる史料を幅広く読みながら、当時の社会や地域について学んでいこうと思っています。

会は**毎月第 2・第 4 金曜日の午前 10 時から午後 3 時頃**まで、淑水記念館で開催しています。どなたでも参加できますし、その日の都合に合わせて途中から参加いただくこともできます。初心者の方も大歓迎ですので、くずし字が読めるようになりたい方や昔のことに興味のある方はぜひ当アーカイブズまでご連絡下さい。皆さんで楽しく史料を読んでいければと思います。

---

# 淑徳大学アーカイブズ日誌（2012 年 12 月～2013 年 6 月）

2012 年

| | |
|---|---|
| 12 月 1 日 | 『淑徳大学アーカイブズ・ニュース』第 6 号発行。 |
| 12 月 8 日 | 追手門学院大学創立 50 周年記念講演会参加（於追手門学院大学学生会館）。 |
| 12 月 12 日 | 旧淑徳幼児教育専門学校聖歌隊の制服寄贈。 |
| 12 月 13 日 | 全国大学史資料協議会東日本部会第 82 回研究会参加(於東海大学湘南キャンパス)。 |
| 12 月 14 日 | 第 30 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。 |
| 12 月 14 日 | 総合福祉学部結城康博准教授ゼミ学生 2013 年度アーカイブズ特別展見学。 |
| 12 月 17 日 | 科研費助成事業の作業で撮影のため業者に貸し出していたマハヤナ学園所蔵文書返却。 |
| 12 月 17 日 | 平成 24 年度「高瀬真卿関係資料の研究」第 3 回共同研究会出席（池袋アット・ビジネスセンター別館）。 |
| 12 月 21 日 | 科研費助成事業の作業で業者に委託していたマハヤナ学園所蔵文書の撮影データ納品。 |
| 12 月 25 日 | アーカイブズ特別展の展示資料提供者東京都町田市小島資料館の小島政孝氏見学のため来室。 |
| 12 月 25 日 | 福田会育児院史研究会出席（於専修大学神田キャンパス）。 |

2013 年

| | |
|---|---|
| 1 月 11 日 | 第 31 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。 |
| 1 月 17 日 | アドミッション・オフィスから大乗淑徳学園・マハヤナ学園元理事長故長谷川よし子先生の会葬御礼寄贈。 |
| 1 月 17 日 | 福田会職員 2 名来室しアーカイブズで預かっている福田会文書閲覧。 |
| 1 月 21 日 | 福田会育児院史研究会作業部会出席（於東京児童福祉研究所九段研究所）。 |
| 1 月 22 日 | 野田市郷土博物館の大貫洋介氏アーカイブズ特別展見学。 |
| 1 月 24 日 | 全国大学史資料協議会東日本部会第 83 回研究会参加(於専修大学神田キャンパス)。 |
| 1 月 25 日 | 第 32 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。 |
| 1 月 25 日 | 科研費助成事業の作業で社会福祉法人・施設における文書管理に関するアンケートを全国 782 施設に郵送。 |
| 1 月 28 日 | 平成 24 年度第 2 回淑徳大学アーカイブズ運営委員会開催（於学園本部）。 |
| 1 月 28 日 | アドミッション・オフィスから国際コミュニケーション学部環境教育フォーラム関係資料寄贈。 |
| 2 月 6 日 | 資料燻蒸の見積もりを業者に依頼。 |
| 2 月 8 日 | 第 33 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。 |
| 2 月 8 日～9 日 | アーカイブズ所蔵高瀬真卿関係資料集中整理（於淑徳大学千葉キャンパス）。 |
| 2 月 12 日 | 本年 5 月に淑徳大学で開催される社会事業史学会で行う「社会事業史学会 40 年のあゆみ」展打ち合わせ（於淑徳大学千葉キャンパス）。 |
| 2 月 13 日 | 総務課保管の教授会議事録及び関係資料撮影の見積もりを業者に依頼。 |
| 2 月 15 日 | 桃山学院史料室視察。 |
| 2 月 15 日 | 福田会育児院史研究会出席（於東京児童福祉研究所九段研究所）。 |
| 2 月 18 日 | 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会関東部会第 270 回定例研究会参加（於国立公 |

文書館)。

2 月 19 日　アーカイブズ所蔵高瀬真卿関係資料集中整理（於淑徳大学千葉キャンパス)。

2 月 21 日　金子保総合福祉学部特任教授より資料「飯田朝先生を送る」寄贈。

2 月 22 日　千葉県立中央図書館資料課へアーカイブズ・ニュースと育児展の図録送付。

2 月 22 日　第 34 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。

2 月 22 日　国際コミュニケーション学部社会福祉コースの学生・教員 24 名アーカイブズ特別展見学。

2 月 25 日　本部募金広報室の中村博彦氏淑徳幼児教育専門学校の昭和 57 年頃の科目編成に関する資料調査のため来室。

3 月 1 日　平成 24 年度リーダーズキャンプ参加学生にサークル・クラブ・委員会等の活動資料の提供を呼び掛ける（於ヴェルシオーネ若潮)。

3 月 7 日　教授会議事録及び関係資料撮影のため業者が撮影機材搬入。

3 月 8 日　第 35 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。

3 月 11 日～15 日　教授会議事録及び関係資料のマイクロフィルム撮影作業(業者委託)。

3 月 11 日～18 日　寄贈資料と淑徳幼児教育専門学校移管資料の燻蒸作業(業者委託)。

3 月 18 日　金子保特任教授より書類及び書籍等の資料寄贈。

3 月 20 日　淑徳大学アーカイブズ叢書 2『高瀬真卿日記　二』刊行。

3 月 21 日　アーカイブズ特別展の展示資料提供者平山秀夫氏の妹さん等 2 名見学のため来室。

3 月 22 日　第 36 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。

3 月 29 日　福田会育児院史研究会出席（於東京児童福祉研究所九段研究所)。

4 月 4 日・5 日　パネルシアターサークル「でんでん虫」より公演記録等の資料寄贈。

4 月 11 日　池袋サテライト・キャンパスより公開講座のポスターや刊行物等寄贈。

4 月 12 日　第 37 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。

4 月 18 日　『千葉関東地域社会福祉史研究会』第 37 号納品。

4 月 19 日　福田会育児院史研究会出席（於東京児童福祉研究所九段研究所)。

4 月 21 日　日本アーカイブズ学会 2011 年度大会参加（於学習院大学)。

4 月 26 日　第 38 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会。

5 月 8 日　淑徳大学 50 年史編纂委員会開催（於池袋サテライト・キャンパス)。

5 月 9 日　淑徳共生苑より『淑徳共生苑だより』第 21 号寄贈。

5 月 10 日　第 39 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。

5 月 11 日～12 日　社会事業史学会第 41 回大会参加（於淑徳大学千葉キャンパス)。

5 月 11 日　淑徳大学アーカイブズ展示「吉田久一展―社会事業史研究のあゆみ―」開催。

5 月 11 日　展示図録『吉田久一展―社会事業史研究のあゆみ―』刊行。

5 月 16 日　卒業生家永真由美氏より『淑徳大学広報』・卒業式次第・大学パンフレット等寄贈。

5 月 18 日　豊島区・豊島新聞社・マハヤナ学園・長谷川仏教文化研究所共催「池袋物語Ⅷスペシャル　マハヤナ学園の創設と活動」出席（於淑徳巣鴨中・高等学校視聴覚室)。

5 月 24 日　第 40 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。

5 月 28 日　国際コミュニケーション学部小倉常明准教授他 1 名福祉機器展示室見学。

5 月 29 日　全国大学史資料協議会東日本部会 2013 年度総会出席（於中央大学後楽園キャンパス)。

5 月 29 日　福田会育児院史研究会々員及び福田会関係者がポーランド・ワルシャワ大学日本語

学科エヴァ・ルトコフスカ教授を囲み大正時代のポーランド孤児来日の件等について懇談（於福田会）。

5 月 31 日　福田会育児院史研究会出席（於東京児童福祉研究所九段研究所）。

5 月 31 日　大学職員菅谷厚子氏より「昭和 58 年度職員研修会報告書」寄贈。

6 月 3 日　出版社大空社からの依頼により吉田久一展の図録送付。

6 月 6 日　卒業生横川民夫氏よりサークル「ドルフィンズ」の 20 年史寄贈。

6 月 10 日　福田会職員 2 名来室しアーカイブズで預かっている福田会文書閲覧。

6 月 12 日　全国歴史資料保存利用機関連絡協議会関東部会平成 25 年度総会及び講演会参加（於埼玉会館）。

6 月 13 日　新潟日報社より吉田久一氏の母の名前の表記について問い合わせがある。

6 月 13 日　弁護士渥美雅子氏・淑徳大学総合福祉学部柏女霊峰教授アーカイブズ特別展見学。

6 月 14 日　第 41 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。

6 月 17 日　花園大学の林信明教授より故吉田久一氏の花園大学での講演テープ寄贈。

6 月 19 日　淑徳大学創立 50 周年・学祖 50 回忌記念事業委員会及び同実行委員会合同委員会出席（於リビエラ東京）。

6 月 22 日　日本歴史学協会主催史料保存利用問題シンポジウム「東日本大震災から二年史料の救済、保全のこれから」参加（於駒澤大学）。

6 月 26 日　今年度の特別展の準備のため千葉市中央図書館と千葉県文書館調査。

6 月 26 日　東京都板橋区の前澤明氏よりマハヤナ中央病院発行の句集『春草』寄贈。

6 月 28 日　第 42 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。

淑徳大学アーカイブズでは、大学及び大乗淑徳学園に関係する資料を広く収集しています。

①大学及び学園が発行した新聞・雑誌・広報誌・年報・報告書等。

②学生時代の写真・講義ノート・教科書・手帳・日記・記念品・記章・各種書類等。

③学生時代に使用していたもの。

④大学及び学園のサークルや研究会の活動を示すもの。

上記以外の物でも結構ですので、お気づきのものがあればお気軽にご連絡下さい。

また、大学及び学園の各部署や学部学科、機関で保存期間の満了した文書、あるいは廃棄の対象となる文書が発生した場合は、大学アーカイブズまでご一報下さい。

SHUKUTOKU

淑徳大学

アーカイブズ・ニュース　第 7 号

NEWSLETTER of SHUKUTOKU UNIVERSITY ARCHIVES

発行日　2013 年 7 月 31 日

編集・発行　淑徳大学アーカイブズ

〒260-8701

千葉県千葉市中央区大巌寺町 200

TEL　043-265-7526（直通）

e-mail　archives@soc.shukutoku.ac.jp